

思 い 出 す ま ま に

荘 司 宏 明

1983年9月10日、刈羽郡小国町八石山、私が池上先生と初めて出会った日であります。じねんじょ会に入会し約3ヶ月後のことでした。先生のことは噂には聞いておりましたが、年齢を感じさせない軽快な足取り、そしてどんな質問をしても必ず明解な答えが返ってくるため「この爺さんはただものでないぞ」！これが先生に会った時の第一印象でありました。ただ初対面にも関わらず何か以前より面識のあった方のように感じられたのが、今思い出しても不思議でなりません。

当時、私の植物に対する知識と言えただだ野山を歩いて珍しい花があれば写真に収める程度のもので、分類がどうのとか、生態がどうのなんてことは殆ど無知に近い状態でした。

それが先生に出会って植物について事細かな指導を受けるうちに、植物に対しての知識も増え、同時に観察の仕方や考え方が変わりました。そしてついには植物を採集し標本を作製するという、今まで考えもしなかった行動をするようになりました。それは私が後に植物の分類らしきまねごとをやってみようと志しを立てた大きな要因の1つでもあります。

その後採集会等では何度か一緒にすることがありますが、先生と二人っきりで植物採集に出かけたのは1984年6月9日巻町の角田山でした。朝早くから日没まで丸1日、先生からマンツウマンでご教示いただきました。当日約100種の植物を採集しましたが、その1種1種について懇切丁寧に説明を受けたのは克明に記憶に残っております。おそらく私の今までの人生でこの1日ほど植物に関する知識を詰め込んだ日は外にありませんでした。おかげでその日私の小さい脳細胞の知識を貯蔵する器官は収容能力をオーバーし破裂寸前の状態となったことは決して過言ではありません。

角田山で植物の指導を受けてから1週間後、先生の自宅に伺った折、こんな事を言われた。「荘司くん折角転勤で新潟の住民になったのだから1つの地域を設定し、その場所を1年間詳細に植物調査をやってみてはどうかね、良い勉強になるよ」と、しかし私は、「いやそんな地域を設定し調査するなんてとても不可能です」と答えた。すると先生は「君、調査という広い山塊等を思い浮かべるかも知れないが、まずは何時でも時間が取れた時にちょっと見ることが出来る、そんな場所を最初にやって見なさい」と諭され、候補地として阿賀野川の河口の植生調査を勧められた。当時私は新潟市の河渡新町に住んでいたので取りあえず、近くの阿賀野川の松浜橋下流域を調査場所に設定し、

1984年6月中旬から調査を始めました。

調査前、正直言って河口付近などには、さしたる植物など生えていないだろうとたかをくくっていました。ところが調査を始めて見ると以外や以外、様々な発見がありました。

阿賀野川はご存じのように、川を遡ればその源流は尾瀬沼に通じております。このためワレモコウ、オオヒナノウスツボ、ヤマネコヤナギなどの山地性の植物が何らかの要因で上流から漂着などし、定住していることが時々観察されるため、新たな発見に意欲がでて自然と調査する回数が増加していきました。先生のちょっとした一言が私の植物観察というものに新しい道筋をつけていただいた訳であります。

河口の調査で一番苦労したのが年に数回行われる草刈りであります。そろそろ草が生い茂ってきたから今度の休みにでも調査でもするか、なんてのんびり構えていると堤防を管理している工事事務所によって物の見事に綺麗に刈り取られ涙(?)流したことがありました。そんな時先生は、「ま、世の中そんなものだよ。だから思い立ったら吉日、即実行なんだよ。植物に明日はないんだ、待ってはくれないよ、はっはっはー」と一笑い。勉強になりました。調査を始めて半年たった12月下旬、河口の中州付近で「シダ類のハマハナヤスリ」を見つけ先生のところへ標本を持参した。すると先生は是非現場を見たいということになり、翌日迎えに伺った。その日は生憎みぞれ交じりの天気。内心「先生今日は見に行くのを止めましょうか」と言いたかったが、先生の意気込みに圧倒され言い出せなかった。

ハマハナヤスリは目印を付けておいたのですぐ観察できた。しかし、先生は折角来たのだからとみぞれや吹雪も一向にお構いなし、ほとんど枯草ばかりとなった河口の広い中州周辺の植物を丹念に観察し始めました。私はその後ろ姿をただただ頭が下がる思いで見つめていました。

1985年6月には、じねんじょ会会員の協力により阿賀野川河口の観察会が行われ、約1年におよぶ調査の取りまとめを行なうことが出来ました。その後1987年にはこの調査結果がじねんじょ会誌に「新潟市 阿賀野川河口の植物」としてまとめることが出来ましたが、これも池上先生の手厚いご指導があったからと思っております。

先生はよく植物の調査は連続性がなければいかんと言われた。一回調査してしまうと、その場所は既に調査したのだから終わるケースが非常に多い。これでは本当の意味での調査とは言えない。3年とか5年とか年月が経てから

同じ場所を再調査し、その年次毎に植生がどのように変化していったのかを記録として残さなければ調査した意味がないと。

「阿賀野川河口の植物」をまとめてから今年でもう20年以上も経過しました。再度調査をする必要を感じつつも歳月だけが早い速度で過ぎていきます。

1986年4月千葉県成田市に転勤となり新潟とは疎遠と

なりました。しかし、現在もじねんじょ会の強化合宿等には努めて参加しております。1990年8月、糸魚川市雨飾山の強化合宿で悪天候のため停滞した宿での先生の講義が私にとって最後の講義となったのが残念でなりません。雪と植物について熱く語られた先生の言葉は今でも脳裏から消えることはありません。どうか安らかに。 合 掌

池 上 先 生 の 思 い 出

佐 藤 信 弥

じねんじょの観察会に初めて参加させてもらったのが柏崎の番神海岸でした。この観察会で池上先生から何を教えて頂いたか今は、記憶にはない。ズックの袋と胴乱と手帳を持った先生がおられたとおもいます。この時から池上先生にはたくさんのことをお教え頂き、また、分布図等の原稿では赤ペンで真っ赤になるほど添削してもらい感謝しております。

ところで、68か69年(昭43か44)と思いますが、飯豊の杵差の予備調査に石沢先生がメンバーの1人に加えてくださいました。確か5~6名ではなかったかと思えます。入山した日は晴れていたのですが、その日の夜から雨が激しく降り出して沢沿いのテントの中で二日間停滞したのでした。誰も調査活動をする人はいませんでした。いや、余りの大雨で外へ出られなかったのだと思います。このテントの中で聞いたのが「猿」の話でした。池上先生の友人2人が日光の男体山へ登った。頃は秋も終わり、天気の良い日だったと話された。歩き始めて間もなく小猿が2、3、4匹出てきた。登山者2人の前になり後になりしてついて来る。非常に可愛いのでお菓子をやった。そうしたら猿はそれを持って藪の中に入っていった。2人は又歩き始めた。歩き始めて7、8分も歩かない内にまたさっきの猿が現れた。お菓子を要求しているようであった。仕方がないのでお菓子をやった。サルは再び藪の中に消えた。これでもう出て来ないと思った。いやいや、3、4分も歩かない内に現われたという。しかも2匹ではなく5、6匹に増えていたといわれました。しょうがないと思いながらもまたお菓子を投げ与えた。また、サルの群れは藪の中に消えた。今度は消えて間もなく現れた。その数は20数匹の群れになってあらわれた。キイキイと鳴き声を出し合って2人を取り囲

んでいるようであった。大きなカエデの技を見上げたら大きな猿がいた。この猿がボス猿で集団を統率していると2人は思った。2人はこの猿の統率の取れた集団行動に恐怖心を感じた。2人は持っていた握り飯や果物、非常食用の乾パンなどの全部を出来るだけ速くの藪へ抛りなげた。猿の群れがこの食料を漁っている隙に一目散に山を駆け下りたという話です。

ところで、このテントの中だったかどうかはたしかではない、この話と同様の体験話を石沢先生から聞きました。「怖くなって車の中に逃げて中から施錠をした」と話されました。蛇の髭・龍の髭類の調査のために1人で山に入った。場所は村上市の間島、早川付近とお聞きました。猿が出てきて苺を食い荒らす地域であるともっぱらの噂を聞いていた。

さて、杵差の予備調査で我々は雨が上がった最後の1日だけ調査行動した。カモスの頭で引き返したがカモスの頭へ到達するには川幅20m程の谷川があり、ゴンドラが設置されていた。行きも帰りもこのゴンドラは我々のいる対岸にあった。これでは対岸に渡ることが出来ない。どうするのかこの川を渡渉するしかないかと覚悟は出来ていた。ところが高橋庄一氏がゴンドラのワイヤー伝いに対岸まで超人間的な技で渡りゴンドラを手許の岸へもってきたのです。もちろんゴンドラに乗って渡渉することなしに渡ったのです。池上先生にはこのような特殊な能力を持った教え子がおられることに感心しました。なお高橋庄一氏は峡彩山岳会の会員であり、山の武勇伝をこのテントで聞きました。

この調査が私にとって、池上先生と寝食を共にした「じねんじょ」の始まりでした。